

I 環境科学系の研究交流

極東地域研究センターの環境研究班では、2014年3月に、二つの研究交流を行いました。一つは、ノルウェーのトロムソ大学から京都大学に研究のため滞在中の Elizabeth Cooper 教授を招いてのセミナーの開催、もう一つは官学が連携して環境保全を実践できるかを考える研究フォーラムの開催です。いずれの取組も、交流を通じて更なる連携が期待されます。

Cooper 教授の来学は、昨年に引続き二度目です。「Warmer Shorter Winters Disrupt Arctic Terrestrial Ecosystems」と題した講演の中で、気候変動による温暖な冬の到来が高緯度北極圏の生態系にどのような影響を及ぼしうるのかについて、野外実験に基づく予測結果をお話下さいました。気候変動シナリオでは、冬季に気温が上昇するとともに降雪量が増えることが予想されていますが、この変化により生態系における炭素の循環がどのような影響を受けるのか、興味深いテーマです。極東地域研究センターの杉浦幸之助准教授は「Bottlenecks for developing a sophisticated physical-based land surface model related to snow process」と題する講演で、高緯度地域における降雪量を正確に測定することの難しさを紹介して下さいました。お二人の専門分野は異なりますが、それぞれの研究は「雪」で繋がっており、今後の共同研究の発展が期待できました。



写真1. 講演中のエリザベス・クーパー先生 (3月6日)。

3月24日には、富山大学理学部多目的ホールにて、第6回富山環境プロジェクトフォーラム「大気環境の変化と生態系」を開催しました。演者は、東京農工大学産学官連携研究員の山口真弘氏（樹木生理生態学）、富山大学極東地域研究センター研究員の佐澤和人氏（環境分析化学）、富山県環境科学センター主任研究員の初鹿宏壮氏（気象学）、富山県生活環境文化政策課主任の八田哲典氏、以上の四名でした。演者の専門分野や所属は異なりますが、お互い協力し合いながら、公共の財産である環境を保全していこうということで、意見の一致が見られました。こちら、今後の官学の連携が期待できました。極東地域研究センターでは、海外の研究者や地元の自治体等と連携して、

特色ある教育研究を推進していきます。

(文責：和田)

II 現地調査報告：バンコク

2014年3月に環境省総合推進費のプロジェクトである「静脈産業の新興国展開に向けたリサイクルシステムの開発とその普及に係る総合的研究について」(K123002、研究代表者：慶應義塾大学細田衛士教授)の一環として、バンコクのリサイクル事業者を視察する機会がありました。

東アジア地域の廃棄物処理及びリサイクルビジネスは長く中国でのビジネスの拡大として成長してきました。我々のプロジェクトは新興国展開として中国をメインに調査を行ってきましたが、一部地域での賃金上昇やより安定した取引、リスク分散などの観点から東南アジア地域とのリサイクルも注目を集めていることからタイ調査を行いました。



写真2. 手作業による廃プラスチック選別の様子

運用上の課題はまだありますが、タイ国内でも産業廃棄物についてはマニフェスト制度が整備されており、少なくともルールとしては処理を委託した廃棄物がトレース出来るようになっています。

意外であったのは我々が調査した企業はどれも輸入ゴミは扱っていないという点です。一方でPETやE-wasteの一部について中国等に輸出しています。今後、ビジネス規模の拡大に応じて、処理量確保のために輸入ゴミの集荷を目指す動きは十分に考えられます。その際の適正処理を担保するためのレジームが重要ですが、チュラロンコン大学での報告会では、政府の委託で研究しているリサイクル関連法案の改正案についての論文が報告されました。こうした国の骨格が出来上がる過程をみることができるとが新興国調査の醍醐味でもあります。(文責：山本)

III 研究プロジェクトの紹介

ここ数年一橋大学経済研究所の都留康教授が代表者である「製品開発と人材マネジメントの日中

韓比較」研究プロジェクトに参画してきた。このプロジェクトは日本国内の研究者 6 名を中心に発足したものである。2008 年から、一橋大学の「東アジア政策研究プロジェクト」の助成を受け、日本、中国と韓国のそれぞれのリーディング企業へのインタビュー調査を行いながら、3カ国の製造企業とシステム開発企業を対象にアンケート調査を実施した。その後も、日本学術振興会・科学研究補助金の基盤研究(B)や民間団体の研究助成も受けながら、毎月研究会を開き、ディスカッションを重ねてきた。その成果として、2012年に『世界の工場から世界の開発拠点へ：製品開発と人材マネジメントの日中韓比較』(都留康・守島基博編著、東洋経済新報社)を刊行した。同書では、製品開発と人材マネジメントの関係に存在する補完性とこの関係についての3カ国間の企業の差異が見出された。

しかし、この研究を進めていくうち、われわれはさらに次の課題を明らかにする必要があると意識し始めた。まず3カ国の会社の製品開発戦略と人材マネジメントとの関係に関する違いを理解するためには、単に企業側の戦略や慣行のみならず、社員側の行動や反応がどうであるのかを具体的に知る必要がある。そしてある特定の製品アーキテクチャやある特定の人材マネジメントの方法が選択されるとしても、いったいどのような組織能力によって裏打ちされたものなのかということも理解する必要がある。

以上の問題意識をもって、2013年からは新たな研究をスタートした。この研究では、以前の研究成果をふまえ、さらに日本・中国・韓国の企業の製品開発プロセスに焦点を絞り、企業内における開発組織レベルでの実態調査に基づき、競争優位の源泉である「組織能力」の内実とその開発成果への影響を明らかにしようと考えている。

今年度から日本学術振興会・科学研究補助金の基盤研究(海外学術調査)の助成を受け、3年間で、「競争優位の源泉としての組織能力—日本・中国・韓国企業の事例的・計量的比較分析」という題目の研究を進めていく予定である。

この研究を通して、韓国・中国企業の攻勢にさらされ、なぜ日本企業は苦境に立たされているのかという真因を明らかにし、現在日本企業の抱える問題点とその打開の方向を明確にすることが期待できる。(文責 馬駿)

IV 国際会議開催のお知らせ

極東地域研究センターでは今夏以下の二つの国際会議を開催します。興味のある方はお気軽にご

参加ください。詳細は追って極東地域研究センターHPにてお知らせいたします。

1. 韓国・仁荷大学、台湾国立大学及び ERINA との四機関会議：北東アジアの FTA や流通の問題を中心に議論を行います(使用言語：英語)。

日時：2014年7月2日(水) 13:00-17:30

場所：富山大学経済学部棟 7F 大会議室

2. 北東アジア学術ネットワーク (NAAN)：中国・中南林業科技大学と韓国・江原大学および富山大学・極東地域研究センターでは毎年北東アジアの経済や環境に関する問題を討議する会議を持ち回りで開催しています。本年は以下の要領にて開催します(使用言語：英語)。

日時：2014年8月23日(土) 9:30-17:30

午前：Waste Management and Recycling in East Asia (環境省総合推進費プロジェクト)

午後：経済・経営・環境の分科会

場所：富山大学経済学部棟 7F 中・大会議室

(文責：今村)

V 地域研究四方山話 (12) 降車異聞

日本ではバスから降りようとして早めに立ち上がると、「停車してからお立ち下さい」と注意される。しかし韓国では停留所と停留所の真ん中くらいまでくると席を立つのが一般的である。ラッシュアワーで混んでいるから早めに入口までの道を確認しようというのではなく、昼間のすいているバスのなかでも同様である。バスばかりではなく、地下鉄でも早めに立ち上がる人が多い。よほど韓国の人はせっかちなのかとも思うが、普段の歩くスピードが殊更速いわけでもない。

なかには譲ってもらった席を早々に立ち上がるお年寄りもいる。儒教精神が健在な韓国では、お年寄りに席を譲る若者をよく見かける。早々に席を立つお年寄りを見ていると、日本だったら「せっかく席を譲ったのに」という気持ちになってしまわないかと心配になるほどだが、韓国では当たり前のことのようである。

ソウルの地下鉄は便利なのでよく利用するのだが、還暦も過ぎた筆者はまだ席を譲られたことはない。「若く見えるからなのだろう」と自分で自分を慰めているところである。

(文責：今村)